

古文書を読む会学習記録

作成日 平成28年8月26日

開催日	平成28年8月25日	時 間	10:00～12:00
場 所	区役所リハーサル室	出席人数	16名
講 師	真田 雅行氏	作成者	松本 和俊
テーマ	第二学習 奥の細道⑧		
概要	<p>小松→那谷→山中→全昌寺・汐越の松 加賀国小松に至る途中の吟 ・赤々と日はつれなくも秋の風 小松という所で、その印象をよむ。 ・しほらしき名や小松吹く萩すすき 太田（多太）神社に参詣。齊藤実盛の甲（かぶと）、錦の切れ（布）がある。この甲と切れは、幼いころ実盛に助けられた木曾義仲が願状を添えてこの神社に納めたとのこと。 ・むざんやな甲の下のきりぎりす 山中温泉に行く途中、霊峰・白山を後ろに見て行くと山際に観音堂があった。花山法皇が西国三十三所の巡礼を終えた後、千手観音菩薩像を安置し、那谷と名付けられた。西国三十三所は一番・紀州的那智山に始まり三十三番・濃州の谷汲山で終わる。この二寺より一字ずつをとって那谷とした由。様々の奇石、古松があり、茅葺の小堂が奇岩上にあり趣深い。 ・石山の石より白し秋の風 山中温泉に浴す。その効能は有明（有馬の誤り）に次ぐという。 ・山中や菊はたおらぬ湯の匂（にほい） 宿の主は、まだ子供である。その父は俳諧を好んだ。京都の商人・貞室が若いころに当地に来たとき、句作のまづかったことを恥じて帰京。貞門の祖といわれる松永貞徳の門人になり、有名になったが、この村の俳諧作品の添削、批評などの謝礼は受け取らなかったという。曾良は腹の具合が悪く、知人のいる伊勢国長島に先に旅立っていった。 ・行き行きてたふれ伏すとも萩の原 曾良 別れの寂しさを芭蕉も吟ず。 ・今日よりや書付消さん笠の露</p> <p><全昌寺 汐越の松></p> <p>大聖寺近くに金昌寺がある。曾良も前夜この寺に泊まって ・終宵（よもすがら）秋風聞くやうらの山 という句を残した。 たった一晚離れただけなのに、千里隔てたように感じる。 翌朝、寺を出立しようとする若い僧侶が紙と硯を持って追っかけてくる。丁度、庭の柳が散っていたので ・庭掃来て出ばや寺に散る柳 と詠んで出立する。 越前の境、吉崎の入江を船で汐越の松を訪ねる。西行法師が ・終宵（よもすがら）嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松 と詠じているが、この一首で全てを言い尽くしている。</p>		
予定	平成28年9月8日 10:00～12:00 於:区役所リハーサル室 第一学習 赤井村 石井家文書 ⑨		